

## アジア太平洋管理会計学会2015年度大会を終えて

上 塾 進 (Chair of the APMAA Board of Directors ・ 甲南大学名誉教授)

APMAA 2015 の大会風景は You Tube でご覧頂けます。ビデオのタイトルは、UNMER Malang - APMAA Bali Indonesia 2015 です。放映時間は 56 分間と少し長いですが、楽しんで下さい (<https://www.youtube.com/watch?v=CMeWiVbwVM4>)。2016 年 10 月に開催します APMAA 2016 の専用ホームページは <http://apmaa2016.conf.tw/> です。APMAA ホームページ <http://www.apmaa.asia/> 共々お時間の許すときにご覧頂ければと存じます。

### はじめに

Asia-Pacific Management Accounting Association (APMAA) の2015年度大会は、南アジアきっての観光地でバリ島の州都デンパサール (Kota Denpasar) に立地する Warmadewa University および Udayana University の両校を会場に2015年10月26日 (月) から29日 (木) までの4日間、開催された。同大会には、海外18ヶ国から60名余り、主催国であるインドネシアから100名余りが参加した。日本からは執筆者(上塾)を含む15名が参加し、先生方では青木雅明先生(東北大学)、木下徹弘先生(龍谷大学)、林尚毅先生(龍谷大学)、中島真澄先生(千葉商科大学)、森 勇治先生(静岡県立大学)、松岡孝介先生(東北学院大学) および原慎之介先生(名古屋外国語大学) が研究成果を発表された。また、辻 正雄先生(早稲田大学)、細海昌一郎先生(首都大学東京)、大鹿智基先生(早稲田大学) がセッションの moderator ないし discussant を務められた。博士課程学生では高原康太郎氏(早稲田大学)、高橋克幸氏(早稲田大学)、筑波由美子氏(亜細亜大学) および 銭 誠氏(龍谷大学) が研究成果を報告された。以下に大会の様子を日別に報告する。

### 大会1日目(10月27日)

朝9時から正午まで、Board Chairである執筆者の私を議長に2015年度Board of Directors



Meetingが実施された。まず報告事項として、本年度大会委員長の Grahita 先生から大会の現況が説明され、続いて私どもの学会誌 Asia-Pacific Management Accounting Journal (APMAJ) が Thomson Reuters の Emerging Sources Citation Index (ESCI) に、この度、含まれることになったことが報告された。引き続き審議事項に入り、APMAA 2016 の大会委

員長となる国立台北大学の Chu, Hsuan-Lien 先生から提出された詳細な企画書を一時間余り審議した。また、APMAA 2017 の大会委員長となる上海交通大学の Hu, Yiming 先生、および4年先の年次大会開催地を希望されているカタール大学の Elgammal, Mohammed 先生の大会プロポーザルがそれぞれあり、議事を終えたのは正午であった。

午後から夕刻までは、博士課程学生が執筆した論文16本を取り上げたDoctoral Colloquiumが auditoriumで開催された。冒頭、100名以上が集まった会場で、豪華で色彩豊かな民族衣装を身につけたダンシング・チームWelcome Dance: Sekar Jempiringによる厳かな儀式(パフォーマンス)があり、海外からの参加者を圧倒した。引き続きChair of Doctoral Colloquiumである



Mimba先生から歓迎の辞が述べられ、Warmadewa University学長挨拶、APMAA 2015 会長であるNormahの挨拶、そしてAPMAA Chairである私、上埜の挨拶があった。これらのセレモニーを終えて参加者は報告が行われる各教室へと向かった。ちなみに、このColloquiumでは、アドバイザーの一人に選出された細海先生が、マレーシアのUiTMの博士課程学生の論文指導をなされた。

この日の夜はWelcome Dinner が6時からWarmadewa Universityのオーディトリウムで催された。冒頭のDance Sekar Jempiring による儀式に続いて、同大学の学長の挨拶、Chair of the Board of Directorsを務める私の挨拶、2015 APMAA会長であるOmar先生による乾杯挨拶があり、晩餐会に入った。終わったのは8時過ぎであった。

## 大会2日目(10月28日)

2日目からは会場がUdayana Universityに移り、インドネシア舞踊の儀式でもって9時から大会開会式が催され、今大会の共同実行委員長であるSekar先生とGrahita先生による挨拶と、開催校Udayana UniversityのKetut Suastika学長挨拶でもってオープニング・セレモニーがスタートした。

Udayana Universityのキャンパス風景



オープニング・セレモニー



本年度大会の統一テーマは「持続可能な発展を支える管理会計 (Management Accounting for Sustainable Development)」である。お昼を挟み、午前10時45分から午後2時までの間、今年度で3回目となるパネル・セッションが、このテーマの下に開催された。報告者は3名で、Hasan Fauzi先生(Director of Indonesian Centre of Social and Environmental Accounting Research and Development)が論題「Socially Responsible Management Control System」のもと、Janek Ratnatunga先生 (CMA Australia)が論題「Costing Life: Air, Water and Food」のもと、そして、Thomas Ahrens先生 (associate editor of *Contemporary Accounting Research*; United Arab Emirates University) が論題「Theoretical Frameworks for Qualitative Accounting Case Research」のもとにそれぞれ報告された。討議者ならびに会場参加者から各報告者に質問があり、熱い議論が時間いっぱい続いた。

また、2時半から5時までは、In-depth parallel sessions が3会場に分かれて催され、総数9本の論文の報告があった。辻正雄先生が第1会場の、大鹿智基先生が第2会場の moderatorを務められた。第3会場では、森勇治先生と中島真澄先生からそれぞれ以下の研究報告が

あった。

森勇治先生 (静岡県立大学)

Centralised Budgeting in a Decentralised Local Government: A Japanese Story (分権的地方政府における中央集権的な予算編成：日本 のケース)

本研究は、NPM(新公共経営) のコンテキストにおいて住民をはじめとする利害関係者の予算編成への関与について、日本のある地方自治体のケースに基づいて、一つの理解を示すものである。1995年の Hood の 研究で公会計の分野における NPM アプローチが導入され、その重要な研究テーマとして住民参加型予算が取り上げられ、Ahrens and Ferry(2015)等での可能性とともに限界が示されてきた。本研究は日本の地方自治体の予算編成過程を利害関係者へのインタビュー調査に基づいて具体的に取り上げ、当該団体においては、議会、住民、さらには市長でさえ、官僚(財政部門) 主導の予算編成から疎外されていることを明らかにした。加えて、NPM と関連会計技法は欧米で生まれ発展したが、欧米とは異なったコンテキストでは異なった展開を遂げていることから、国際比較研究の意義についても言及した。

中島真澄先生 (千葉商科大学)11/9

*Is Corporate Financial Performance Associated with Corporate Social Responsibility in Crisis?: Focusing on March 11 Disaster*

本研究は、東日本大震災によって被災したが再生した企業(被災再生企業) が再生をどのように果たしていったかについて、社会的責任(Corporate Social Responsibility) に焦点を合わせ検討したものである。本研究では、太田再生条件モデル(2013)を Kanji-Chopra CSR model (2010) に適用し、自然災害等のような危機的状況における社会的責任指数を測定する Ota-Nakashima CSR model を考案し、この Ota-Nakashima CSR model (2014)を用いて算出した社会的責任指数を算出した。本研究は、危機時における CSR と財務業績との関連性を分析するものであり、危機における CSR 研究の 1 貢献となるとする。

夕刻 6 時から会場を大会ホテルの Prama Sanur Beach Bali に移し、ホテル屋外のプールサイ



ドで Conference Dinner が催された。インドネシア舞踊の儀式に始まり、執筆者の私や Omar 先生の挨拶、さらには次年度大会 APMAA 2016 の実行委員長、国立台北大学(National Taipei University, Taiwan) の Chu, Hsuan-Lien 先生によるブローモーション・プレゼンテーションが行われた。晚餐会に入った後、私から、お二人の今大会実行委員長ならびに Doctoral Colloquium Chair に対してクリスタル製の感謝楯を贈呈した。賑やかな宴を終えたのは 8 時半頃であ

った。

大会3日目(10月28日)

3日目は全日 parallel sessions に割かれ、32セッションで96の研究報告があった。日本からは8件の研究報告があった。

青木雅明先生(東北大学)・間普 崇先生(関東学園大学)

The Experimental Analysis of the Relationship between Greenhouse Gas Emission and Corporate Value

大気汚染は最も深刻な環境問題の一つであり、特に、温室効果ガスの一種である二酸化炭素排出量については多くの人が関心を持っている。本研究の目的は、二酸化炭素排出量と企業価値との間の関係を示すことにある。本研究では、ROC(Return on Carbon：営業利益／二酸化炭素排出量)という指標と GEPS(Gas Emission per Sales：二酸化炭素排出量／売上高)という指標を導入し分析を行った。その結果、ROCは企業価値と統計的に有意な関係がある、すなわち、二酸化炭素排出量と企業価値があることを示すことができた。また、GEPSの大きさがROCと企業価値の間に影響を与えることを見いだした。これは、GEPSの大きな企業（二酸化炭素排出量の管理を効率的に行っているとは考えられない企業）は、二酸化炭素排出量を削減（GEPSを下げる）することにより企業価値を高めることが可能であることを示唆しており、二酸化炭素排出量は非財務的な業績評価指標として有用な指標となり得ることを示した。

木下徹弘先生・銭誠氏（龍谷大学）

Chinese MNEs' OFDI Strategy: Linkage between Corporate Objectives and OFDI Strategies：「中国多国籍企業の海外直接投資：企業目的と海外直接投資の結びつき」

本稿は、この10年においてそのプレゼンスが増してきた中国MNEの海外直接投資を、伝統的理論の因果関係モデルではなく、企業のグローバル目標とその手段との関係から捉えようとしたものである。4タイプの中国MNEについて、企業のグローバル目標と海外直接投資戦略の結びつきについての命題を提示し、各命題がケース分析によって補強されている。中国MNEの直接投資行動は、グローバル目標達成のための戦略的行動であって、経済的な論理では捉え難いものであることを明らかにした。

高原康太郎氏（早稲田大学院生）

Earnings Management by Companies with Consecutive Earnings Increases :Using Impairment Losses for Early Reporting of Future Expenses（連続増益達成企業の報告利益管理：減損損失による将来費用の早期計上）

本稿は、減損損失を利用した報告利益管理の検証を目的とする。減損損失は企業の将来費用を早期計上し、将来利益を押し上げることが期待される。本稿では5期以上連続増益を行った連続増益達成企業に着目し、その減損損失の計上行動を調査している。一般に、連続増益達成企業は高い株式リターンを享受することから、経営者は連続増益達成の強いインセンティブを有すると考えられる。そのため、今期の増益幅に応じて積極的に減損損失を計上し将来の連続増益達成可能性を高めると考えられる。検証の結果、連続増益達成企業は増益幅に応じて積極的に減損損失を計上し、減損損失計上額は企業の将来利益成長と正の相関があることを示した。

筑波由美子氏（亜細亜大学大学院生）

Water resources and Environmental Management Accounting-Related to Integrated Report and the social contribution of a company-：「水資源と環境管理会計—統合報告並びに企業の社会的貢献に関連して」

近年、インフラストラクチャー整備が経済発展に大きく影響されているアジア地

域では、水のビジネス市場が拡大すると期待されている。本報告の目的は、普及の見込まれる統合報告において、企業の持続的な発展と社会的貢献に関連した環境管理会計 (EMA) 情報と財務情報との関連性を高める可能性並びに資源情報の充実を図ることを検討することにある。研究方法は国際統合報告評議会 (IIRC) の6つの資本コンセプトを基に水資源にフォーカスしている。環境経営に積極的であり非財務情報量が豊富な BAXTER, SHIMIZU, SCG の取組みを中心に、水資源情報の開示の現状を明らかにしながら、水資源情報の指標の必要性や新たな開示領域の提案を示すとともに今後の課題を抽出している。

林尚毅先生 (龍谷大学)

*Dual Management of MNEs*

**Hayashi, Naoki\***, Japan

松岡孝介先生 (東北学院大学)

*Implementation of Fixed Revenue Accounting at A Japanese Semiconductor Distributor.*

Kenichi Suzuki, Meiji University; **Kohsuke Matsuoka\***, Tohoku Gakuin University, Japan;

Hiromune Ishii, Meiji University Graduate School, Japan

原慎之介先生 (名古屋外国語大学)

*A Study Of Inventory Possessions Before And After The Great East Japan Earthquake: Implications For Just-In-Time In The 21st Century.*

**Shinnosuke Hara\***, Nagoya Univ. of Foreign Studies, Japan

高橋克幸氏 (早稲田大学大学院商学研究科博士後期課程)

*Earnings Management at Segment Income: Using "Other Corporate Expenses"*

**Katsuyuki Takahashi\***, Waseda University

なお、5時30分から Closing Ceremony が催され、その中で APMAA 2015 Best Paper Awards の表彰式が実施された。同夜8時から、Sanur Beach Bali Hotel のレストランに日本からの参加者が集合し、ご苦労さん会を開いた。

#### **APMAA 2015 Best Paper Award Recipients**

Bambang Tjahjadi (Airlangga University, Indonesia), Hariyati (Universitas Negeri Surabaya, Indonesia) and Noorlailie Soewarno (Airlangga University, Indonesia), *Innovation Strategy-Financial Performance Relationship: Roles of Human Capital, Management Accounting Information System, and Internal Process Performance.*

Nik Herda Binti Nik Abdullah (Universiti Teknologi MARA, Malaysia) *The Influence of Dynamic Capabilities on Strategic Management Accounting (SMA) Practices and its Effect on the Value Creation in Government Linked Companies (GLCs)*

#### **大会4日目(10月29日)**

最終日は、Cultural Visitということで一日バス・ツアーが催された。大会ホテルでもある Sanur Beach Bali Hotel を8時半に出発し、午前中はバトゥール山 (Gurung Batur, 1717m) に向かい、雄大な景色を眺めることのできるレストランで軽食をとった。心時よいそよ風を感じながら眼下に見えるバトゥール湖が印象的であった。午後から Bali Zoo を訪れ、そのレストランで昼食をとった。ホテルに戻ったのは6時半過ぎであった。なお、バス・ツアーには、海外からの参加者60名余りと、主催校スタッフ10名余りが参加した。

### おわりに

今回の大会では、学会準備に対するインドネシア主催校の先生方と私どの姿勢の相違を実感した。研究会という側面を重視しがちな私どもと異なり、主催校の先生方はきめ細かなおもてなしを大切にされ、かつ日本では想像もできない多くのスタッフと学生を動員され、盛大な大会を作り上げられた。

最後になるが、日本の研究者が中心になって運営してきた数少ない国際学会であるAPMAAを、今後とも大切にしたいと思う。世界の中での日本のプレゼンスが年々小さくなっており、海外に出かけた時に、以前は「日本からか」と常に問われたが、近年では「中国から」と問われることが多くなった。APMAAにおいて私ども日本が主導権を発揮することは今日では容易でないが、APMAAのCahirを務める私としては、多くの日本の先生方に報告者、moderators, discussantsとしてご参加頂き、小さな世界ながらも日本の存在を維持できればと願っている。